



第25回風花随筆文学賞 入賞作品紹介

ふくい伝統行事「美浜町和田の精霊船送り」

県内の文化講演会・地域の文化活動

『若狭あどがたり集成』の 刊行&記念シンポジウム

若狭路文化研究所（多仁照廣所長）は、（公財）げんでんふれあい福井財団の協賛のもと、嶺南地域で語り継がれてきた昔話を取りまとめた『若狭あどがたり集成』を令和4年3月末に刊行しました。同地域の古老や語り部から集めた135の話を収録し、これに話し言葉や方言を盛り込んだ文字に起こして編集しました。民俗学者で同研究所顧問の金



135の昔話を収めた『若狭あどがたり集成』

また、令和4年7月16日（土）に『若狭あどがたり集成』の刊行を記念した同研究所主催のシンポジウムが美浜町生涯学習センター「なびあす」にて開催され、約70人の来場者がありました。当日は、田中文雅氏の講演、金田久璋氏らを交えた鼎談、昔話の朗読や映像の披露、挿絵原画の展示など盛り沢山のプログラムで、来場者は語り継がれてきた昔話を身近に感じていました。

ジで、十二支など動物の話のほか、正月や盆等の行事にまつわる内容など昔の人々の生活や信仰の様子が伺えます。各昔話からは語り手の気持ちや息遣いが感じられ、臨場感ある正に生きた民俗資料が出来上がりました。現代社会において失われつつある貴重な日本の財産として後世に伝承されていくことを願っています。

田久璋氏が半世紀に渡り採話したものを編集し、就実大元教授の田中文雅氏が解題を加えました。また、地元の朗読グループ「ふくい昔ばなし大学再話研究会」のメンバーからも収録した話のテープ起こし（翻字）に協力しました。「あどがたり」の「あど」とは相づちを打つという意味で、中世以前からの伝統的な昔話伝承の形式として、語り手の語りに聞き手が一節ごとに相づちを打ち、リズムを作り出していたとのこと。相づちの「おつとー」や「はーとーとー」は「尊い」から転じた言葉と考察しています。本は2997ペー



刊行記念シンポジウム

表紙の説明『美浜町和田の精霊船送り』

和田は、天王山西麓の耳川右岸に位置する37世帯の河口の集落。お盆のお精霊（先祖や新仏、無縁さんなど）を再びあの世へと送り返す行事のなかで、海へと精霊船を流すのは、かつては越前海岸や若狭の沿岸でも盛大に行われていました。美浜町内では福井県無形民俗文化財に指定されている菅浜の精霊船送り（8月15日）がよく知られています。



和田では8月16日の午前中に、集落下の墓地前の広場に区民が集まり、竹や萱で約3メートルの精霊船を組み立てます。当地の特徴は古塔婆数本で船尾の舵を作り、早朝に各戸が耳川に流したお盆の供物を子供たちが拾い集め、新仏の数の人形を作って船内に乗せること。夕刻、住職による供養の後、若者によって沖へと流されます。

（写真撮影：吉田俊雄氏）

目次 52

- スポット『若狭あどがたり集成』…………… 2
- 第25回風花随筆文学賞 入賞作品紹介 …… 3～5
- ふくいの伝統行事
- 「美浜町和田の精霊船送り」…………… 6～7
- 県内の文化講演会…………… 8～9
- 地域の文化活動…………… 10
- 情報ファイル…………… 11
- 財団助成事業の日程等…………… 12



財団シンボルマーク

公益財団法人「げんでんふれあい福井財団」は、福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的に、県民のみならずとの絆を大切にしたい広報誌を目指します。

第25回 風花随筆文学賞 入賞作品紹介

「風花随筆文学賞」(同賞実行委員会

主催、げんでんふれあい福井財団特別協賛)の授賞式が4月24日に福井県立図書館多目的ホールで行われました。この文学賞は福井県出身の芥川賞作家「津村節子」さんの随筆「風花の街から」にちなんだ賞で平成9年度に創設され、毎年国内外から多くの作品が寄せられています。当財団では、文化・芸術を愛する県民風土を高める顕彰事業として毎年特別協賛し、「げんでんふれあい福井財団賞」を贈呈しています。今回は、一般の部「金川久代」さんと高校の部「白石奈々」さんの二人が「げんでんふれあい福井財団賞」を授賞されました。

一般の部(応募作品数1448編)

- ▽《最優秀賞・福井県知事賞》鈴木恵子(東京都)「死の谷」を戒名につけた父
- ▽《優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞》金川久代(福岡県)「父からの贈りもの」
- ▽《優秀賞・福井新聞社賞》伊藤直子(福井県)「父のグンゼ」
- ▽《優秀賞・福井仁愛学園賞》感王寺美智子(福岡県)「ふるさとの雪は」
- ▽《優秀賞・実行委員会賞》杉山七恵(神奈川県)「同級生の思い出」

高校生の部(応募作品数3009編)

- ▽《最優秀賞・福井県知事賞》佐々木萌(福井県)「忘れられない旅」
- ▽《優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞》白石奈々(京都府)「幸福の時間」
- ▽《優秀賞・福井新聞社賞》田中紘子(福井県)「父と私」
- ▽《優秀賞・福井仁愛学園賞》川上真陽(福井県)「車とハイヒール」
- ▽《優秀賞・実行委員会賞》加藤萌花(福井県)「二十歳の贈り物」
- ▽《優秀賞・実行委員会賞》牧山イザベル(福井県)「二本の傘」
- ▽《佳作》清水綾乃(蘭延いづ)「北海道」「追憶」
- ▽《佳作》田中美琴(福井県)「修学旅行みやげ」
- ▽《佳作》荻野幸生(福井県)「言葉にできない」
- ▽《佳作》三好なつき(福井県)「弱さと向き合う」

▽《奨励賞》20編

- 野路れい奈、五十嵐幹太(藤島)
- 金森真純、吉川美咲、木村美咲、塚本百朋(羽水)
- 小番場実紅(三国)
- 朝日皓介(福井農林)
- 山端らむ、山野依吹(武生商)
- 斎藤美帆、佐々木愛七(武生商工)
- 春田新菜、塚本愛莉、指岡亜美、宮川華、吉田汐音(仁愛女)
- 真鍋遥音(立命館慶祥)
- 荒木帆翔(ルネサンス大阪)
- ささみ(山口県立熊毛南)

※入賞作品は、「風花随筆文学賞」ホームページ(福井県ふるさと文学館ホームページ内)に掲載されております。また、作品集をご希望の方は、実行委員会事務局(福井県ふるさと文学館内 ☎0776-33-8866)までお問い合わせください。



(授賞者等の集合写真) 県立図書館多目的ホール
杉本達治福井県知事・授賞者・審査委員・実行委員・来賓の皆さん

一般の部

優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞

「父からの贈りもの」



金川 久代さん
(福岡県)

小学校一年生の音楽の時間に先生が「好きな楽器に触れて音を出してみよう。」と言った。

皆、我先にと興味ある楽器の前に集まった。私は友達と木琴を選んだ。木琴に触れるのは初めてだった。片手でバチを持ち、ドレミの音階を叩いた。軽く叩いただけなのに明るく弾んだ音が出た。感動した。私と交代した友達は両手にバチを持ち、「みかんの花咲く丘」を上手に演奏した。当時、ラジオからよく流れていて、誰もが一度は耳にしたことのある曲だった。他の楽器に触れていた皆も、その演奏に聴き入った。終ると先生も一緒に拍手した。学校から一緒に帰りながら「すごかね。何ですぐにできると。」とたずねると「家のピアノで弾いた事があるけん。ピアノより木琴の方が易かとよ。」と答えた。友達がいつもより眩しく、大人に見えた。

家に木琴があつたら楽しいだろうな。いつでも好きな時に叩けると、木琴が欲しくなった。でも、生活が苦しく、私達の為に家の狭い仕事場で夜遅くまで働いている父に、欲しいとは言えなかった。

次の日学校から帰ると、いつものように、仕事場の父に声をかけに行った。その時、隅の方に置いてあつたベニヤ

板の切れ端を見つけた。「父さんこれ貰つてよかね。」と聞くと、「角でけがせんように」と言いながら手渡ししてくれた。

その日は、いつもより早く宿題を済ませた。そして、ベニヤ板にクレヨンで木琴の絵を描いた。バチの代りに竹の定規で叩いてみた。壁を叩いたような音だったが、木琴を演奏している気分になった。楽しかった。夢中で叩いていると、いつの間にか私の後ろに立っていた父が、のぞき込みながら「楽しそうな音がすると思ったら、木琴やね。」と言った。私が「木琴じゃなかっただのベニヤ板と。」と言つと「ちゃんとリズムがとれていて上手か。」とほめてくれた。

学校から帰って宿題を済ませると、毎日のように、ベニヤ板の木琴を叩いた。両手にバチを持ち、叩ける曲も次第に増えた。

ある日父が「今から川原に竹をとりに行く。一緒に行こう。」と誘った。

家の近くには、大きな川があり、川岸には大人の背丈より高い竹が生えていた。

七夕には、若い竹の枝を切ってきて七夕飾りを皆で作った。子供の日には、大きな笹の葉を取ってきてチマキを作っていた。

「今日は何でとりに行く。何をすると。」とたずねると「内緒」と答えなかった。兄とすぐ下の妹も一緒に、父の後をついて行った。父は、いつもより大きい竹を選び、小枝や葉を鎌でおとした。それを皆で担いで帰った。何をするかずっと気になっていた。

十日程過ぎた頃、学校から帰ると父が、大きな風呂敷で覆った物をテーブルの上に置いて待っていた。開けると、同じ長さの二本の垂木の上に、厚さ一センチメートル、巾二センチメートル程の、長さの異なる竹が、長い順に左から右へ並んでいた。垂木と竹の間には、見覚えのある父のフェルトの帽子を丸く切り抜いて作ったクッションが敷いてあつた。

「わあ木琴だ。」と歓声をあげた。羽子板の羽の黒い実がついた二本の細い竹の棒を渡しながら「叩いてみて。」と言った。覚えた曲を叩いた。ベニヤ板の木琴とちがいに曲になった。「すぐ演奏できてすごい。いつも練習していたからね。」と父が嬉しそうに言った。「この木琴は私のと。」とたずねると、「皆にも作った。いつでも好きな時に叩いて。竹で作ったので竹琴だけど。」と笑いながら言った。「そうか竹琴か。」と私もつられて笑った。

夕方、兄が学校から帰ってくると、

真つすぐな竹にいくつもの穴を開けて作った笛を渡した。「この間の竹はこれを作る為だったと。」と兄が言い、すぐに吹いた。二人の妹には、木を丸く切り抜いて作ったカステネットを、使つて見せながら渡した。家が急に、賑やかになった。

夕食が済むと「これも作っていた。」と父が竹の古い根っ子で作った尺八を持ってきた。そして、口笛を吹くように口をすぼめ「荒城の月」を吹いた。一瞬、シーンと静かになった。

自分達の楽器で、時々家族皆で演奏会のまねごとをした。

七十年前の、物や娯楽の少ない時代に、手作りの楽器は、貴重な遊び道具だった。父のおもいのこもった楽器は、月日がたつと、竹の色があせ、音も変化した。でも、私達の宝物にはかわりなかった。ずっと大切にした。

父が逝つて三十年あまり。残してくれたものは、それぞれの子供に合わせで作られた楽器など、形あるものだけではなかった。工夫して生活することの大切さや楽しさも教わった。これらは、父からの最高の贈りものだったと思っている。

高校生の部

優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞

「幸福の時間」



白石 奈々さん
(京都教育大学附属高等学校 一年)

「もう、目え開けてええで。」
父に言われて固く閉じていたまぶたをそっと開けると、そこは、遙か彼方に地平線をのぞむ、一面の青い海を見下ろす崖のてっぺんだった。崖に打ち寄せる白波、木々の深い緑。突き出た半島に見える、常神岬灯台。

常神へと向かう福井県道二一六号は曲者だった。ぐにやぐにやと何度も曲がり、アップダウンも大きい。小さな頃から車酔いのひどい私が編み出した必殺技は、「目を閉じる」ということ。母も隣で洗面器をかかえて青い顔をしている。京都から一人で車を運転してくれていた父は、そんな私たちを気遣って、いつも目を開けて良いタイミングを教えてください。公営駐車場に車を停めてからも、具合の悪い私たちの代わりに荷物をかかえて狭い集落を何度も往復してくれた。

常神は、澄んだ美しい海にたくさん魚が泳ぐ、「常に神がおわす島」。点在する無人島。寄せ合うように崖に沿って立ち並ぶ家々。たった一軒しかない雑貨屋でアイスを買って食べると、ようやくひと心地ついた。天然記念物の、巨大なソテツを囲むように建てられた宿の部屋は清潔で、窓を開けると潮の香りがする。やさしい笑顔の宿の

主に出迎えられて、父が挨拶を交わしている。私はとたんにソワソワし始めた。早く海に行きたくて仕方ないのだ。船で無人島まで送ってもらい、釣竿を出したら、生き餌をつけて海に垂らす。波の音を聞きながら、深く息をすると、目と耳だけでなく、身体の中まで海色に染まった。幸せな時間。父がシュノーケルをつけて海へ潜り、釣りのポイントを教えてください。家族三人が食べる分の魚だけを釣ると、私もシュノーケルをつけて沖へと泳いでいく。ブイのさらに向こうで、父が手を振っている。夕食は豪華絢爛だった。海の幸がこれでもかと並び、そのどれもがびっくりするくらい美味しい。これ以上、食べられないと思うても食べられる不思議さ。父も母も私も、この幸せな時がずっと続くと思っていた。

「今年は台風で無理そうです。」私が中学一年生の時、定宿の主から電話があった。この常神は県道二一六号線が通行止めになると、陸の孤島になってしまう。宿の主を心配しつつ、「来年を楽しみにしています。」と、母が答えていた。

これ以後、私たちが常神を訪れる機会は来なかった。本当は、その頃から少しずつ変わっていたのだと思う。父が所属していた開発課から管理課に異

動になり、「なんで……。」と家で愚痴るようになった。ちょっとしたことでイライラして、母や私に当たるようになった。母も私も、父が家で安らげるように気を配ったが、父の心を癒やすことはできなかったように思う。

そんな時、塾に行き始めた私を心配して、父がスマホを買ってくれた。友人たちはスマホをコミュニケーションの道具として使いこなしていたが、私は緊急時の連絡手段としてしか使わなかった。父に、「スマホに夢中になって、勉強がおろそかにならないように。」と言われていたせいもあった。しかし、同時にスマホを買った父は、初めてのスマホにのめり込むようになった。平日は帰宅後、深夜二時頃までスマホでゲームをするようになった。仕事のない日は、ほぼ一日中。スマホを手

持ったまま食事をし、布団に入る。外出を厭い、食事も入浴も短時間。会話は減り、最低限のことしかしなくなつた。ゲームに集中できないのか、私が夜勉強をしていると文句を言うようになった。私の閉めた洗面所の扉が、ほんの少し開いているのが気に入らなくて、激しく注意されたこともある。――

自分は、電気をつけっぱなし、戸を開けっ放しでいるのに。
果たして、スマホやゲームが父の癒

しになっているのか、私にはわからない。しかし、眉間に皺を寄せてスマホで夜遅くまでゲームをする父を、幸せそうだとは思えなかった。そう、幸せな時間とは、常神にいた時のような時間を言うのではないだろうか。

あれから三年。父が十年前に特許申請したものが、発明協会で表彰された。表彰状を手持った父は、笑顔で誇らしそうだった。「たいしたことないけどな。」と、言う父を、母と私が褒めると、照れくさそうにしていた。そして、ほんの数分だが、父が少しずつ食事の時に会話をするようになった。

常神は、幸せな子供時代を過ごした父の思い出の土地だった。裕福だった父とその家族は、毎年この常神で夏を過ごしていたらしい。三十年以上経っても、変わらず美しい姿をとどめる常神。神がおわす神秘の島。父が歩む道のりは、今は曲がりくねっているのかもしれない。

常神へと至る、あの長い道のりを思い、私は目を閉じた。

「美浜町和田の精霊船送り」
しゅうらいぶねおく

美浜町

「孟蘭盆」の由来

お盆、すなわち孟蘭盆の行事は、角川『日本史辞典』によると次のような説明が出ています。「孟蘭盆経」に基いて毎年7月15日に死者の霊を祭る供養会。『日本書紀』606（推古14）の記事が初見。平安時代民間にも普及。鎌倉時代からは、施餓鬼会・万灯会があわせて行われ、室町時代、民間では精霊祭・盆踊りとともに山上にたきぎを大文字に燃やすことが始められた。

江戸時代には7月13日から16日までを孟蘭盆とし墓参・中元・敷入・灯籠流し・盆市などの風習が生まれた」云々。

すなわち、「孟蘭盆」（裏盆）とは梵語の「ウランバーナ（倒懸）」が語源とされ、「逆さ吊りの苦しみ」の意味があり、地獄に落ちた亡母の苦しみを救い出すとの、いわゆる目連説話に基づくとされ、古くから仏説として説かれてきました。

多様な日本各地のお盆行事

しかし、多様な日本のお盆の習俗を見ますと、各地のお盆が単に孟蘭盆経に基く宗教的風習とは必ずしも言えないほど、全国にはいろいろなお盆の行事が行われています。日本民俗学の祖、

柳田国男はお盆を日本古来の魂祭りが根底にあると考えました。お盆に仏さん（先祖・新仏・無縁さんなど）を迎え、丁重にもてなして送り出す、お盆の送迎の民俗は決して孟蘭盆経の説くところではありません。すなわち史実以前、仏教渡来以前の、日本における古い靈魂をめぐる民俗が横たわっていることを示しているのです。

嶺南地方でも精霊のお迎えや送りの習俗は多様ですが、たとえば美浜町山上ではかつてお墓へ負い縄を持って行き、背中に仏さんを背負うようにしてお迎えしたと言われています。

福井県内の精霊船送り

大掛かりな精霊船を作って仏さん送りをするのは、越前海岸の福井市白浜や美浜町菅浜、若狭町塩坂越、小川、神子、遊子、小浜市田島、矢代、犬熊、阿納、西小川、宇久、加尾、甲ヶ崎などの若狭湾沿岸の漁村に見られます。

県内最大の精霊船は、福井県無形民俗文化財に指定されている美浜町菅浜の「精来舟」で、8月15日の夕刻に集落下の砂浜から「ウリオイ」と呼ばれる新仏の家人が乗り込み沖合へと流されます。



美浜町菅浜



県内で行われている主な精霊船送り



小浜市西小川（福井新聞社より提供）



福井市白浜（福井新聞社より提供）

靈魂觀・他界觀をあらわす
和田地区の特徴

さて、今回取り上げる同町和田の精霊船送りは、例年の8月16日に集落下の墓地前の広場で開催。当日午前中に区民が集合し、竹や萱を組み合わせ、約3メートルの精霊船を作ります。当地の特徴は、古塔婆数本を組んで船尾の舵に見立て、早朝に各家が流した盆の供物（お精霊さん）を子供たちが拾い集めて新仏の数の人形を作り、船に乗せます。賑やかに施餓鬼旗で飾られて、墓地での供養のあと、青年たちに担がれて和田漁港から流されます。いずれにしても、海の向こうにあの世を仮想する日本人の靈魂觀、他界觀が、よくうかがわれる盆行事と言っても過言ではありません。

（日本地名研究所

所長 金田久璋）



左の写真①～⑨は和田地区の精霊船の製作から海に送り出されるまでの様子



全長約3メートルの精霊船の製作（竹や萱で船を組み立てた後、供物に乗せ施餓鬼旗で飾る）

僧侶による法要（先祖、新仏、無縁さんの供養）

賑やかに色紙で飾られた施餓鬼旗

子供たちが供物を集めて作った新仏の人形

浜に集まって船を見送る観衆

曳き船に引かれて厳かに
沖へ流される精霊船

地元の青年たちに担がれて
海へ送り出される精霊船

（写真撮影：吉田俊雄氏）

文化講演会 (当財団との共催)

当財団では、県内各地域において
関係団体と共催で文化講演会を開催しています。

敦賀市連合婦人会 文化講演会

「あなたがあなたのままで
輝くために」

講師 英月氏

(真宗佛光寺派「大行寺」住職)

令和4年4月23日(土) 敦賀市西公民館において、敦賀市連合婦人会と共催で文化講演会を開催しました。講師は、京都市の真宗佛光寺派「大行寺」(だいがうじ)住職の英月(えいげつ)氏で、「あなたがあなたのままで輝くために」と題して講演をされ、当婦人会会員ら46名が参加しました。

講師の英月氏は、9年間渡米された後、大行寺を後継され、現在、国際派



講師：英月氏

僧侶として全国各地で法話をされるほか、悩みを持たれる方の相談もされています。

今回は、英月氏が知り合いも、お金もなく、言葉も通じなくて苦労された海外生活の中で得られた経験を通して、「現状と向き合い見えてきた苦悩を受け入れることで感謝する心が生まれる」という内容で講演されました。

「人は生きていれば仕事や様々な出来事に心が辛くなったり、しんどくなることもあるが、その都度自分の心と向き合い、自分を肯定することで気持ち良くなる。今の自分がラッキーだと感じる。あなたがあなたのままで輝くためのほんの少しの心がけにより、今を軽やかに生き楽しむ手がかりをつかんでほしい。」と、親鸞聖人の教えを交えながらお話しされました。

参加者は、おほかで親しみやすい人柄の英月氏の法話を熱心に聞き入っていました。時たま、おもしろおかしく笑いも交えた言葉に肩の力が抜けホットしたのか、何時しか皆んなの心は和んでいました。



英月氏の講演に聞き入る参加者

福井県連合婦人会 文化講演会 会員のつどい

「異常気象から身を守る
〜天気は何が起こっているのか〜」

講師 斉田季実治氏

(気象予報士・
NHK気象キャスター)

福井県連合婦人会と共催による文化講演会を令和4年7月10日(日) 県生活学習館で開催し、県内各地から会員ら約250人が参加しました。講師は、気象予報士でNHK「ニュースウオッチ9」に出演されている人気気象キャスターの斉田季実治(さいたきみはる)氏で、「異常気象からの身の守り方」などについて講演されました。斉田氏は報道記者の時に自然災害の現場取材する中で被害を伝えるだけでなく未然に防ぎたいとの想いから気象の専門家の道に進まれたそうです。最近



講師：斉田季実治氏

ではNHKの朝ドラ「おかえりモネ」に出演され、気象考証を務められるなど多方面で活躍されています。

講演では、「今年の北陸地方の梅雨明けが統計のある昭和26年以降最も早かったこと」「最近ではテレビやSNSで気象情報を得る方が多いが、災害時にはラジオが有効であること」「天気予報や警報の見方を踏まえつつ、それをいかに実際の命を守る行動に結びつけるかが大事であり、その判断基準を普段から身に着けるために必要な情報を活用すること」などについて、お話しされました。

また、気象キャスターとして、「最新の情報を単に伝えるだけでなく、いかに行動してもらうためにどう伝えるかが重要であること」「日常生活に影響を及ぼす太陽活動の変化など宇宙天気も伝えることが将来必要になること」などについて、お話しされました。身近に異常気象が多く起きている

と、人気キャスターの柔らかく甘い語りに会場は皆酔いしれて聞き入っていました。



福井県連合婦人会 田村会長挨拶

ふくいきらめきフェスティバル2022 輝く未来のためにく多様性を認め合い、ともに進もう

公益財団法人ふくい女性財団は、40の賛助団体で実行委員会を組織して、福井県が「男女共同参画推進月間」と定める6月に、毎年「ふくいきらめきフェスティバル」を開催しています。今年度は公益財団法人げんでんふれあい福井財団と若狭町の共催のもと、パレア若狭にて開催しました。



オープニング演奏

フェスティバルは、オープニングに相応しい美方高校吹奏楽部による若さ弾ける演奏で始まりました。
式典では、男女共同参画社会づくり功労者知事表彰が行われ、4名の長年の功績が讃えられた後、杉本達治知事や小堀友廣県議会副議長、開催地の渡



記念講演 講師：谷崎由依 氏

辺英朗若狭町長にご祝辞をいただきました。
その後、メイン企画の「記念講演」では、本県出身の作家で翻訳家の谷崎由依氏が登壇しました。「明日を紡ぐ女性たちへ」「遠の眠りの」の作者が描く私らしく生きられる世とは！〜と題した講演では、著書『遠の眠りの』の執筆に至ったきっかけや、作品の中で主人公の女性が抱いていた男



田村実行委員長 挨拶



杉本知事 祝辞



熊川宿でまち歩き（体験講座）

性と女性との不公平感、大正時代の女性運動を通して、さらには、著書の中で描かれている、現代にも通じる福井の女性達の面影などを紹介いただきました。講師は、「女性にとって、この世の中はある意味戦場だと思う。この戦いのようないざい日々を何とか生き延びて、自分の思う生き方ができるよう、みなさんも生きる力を紡いでほしい」と聴講者に投げかけました。
フェスティバルではその後、全9種類の講座等を開催しました。「熊川宿でまち歩き」の体験講座では、「若狭町かみなかの語り部」さんと一緒にレトロな町並みを歩いて、熊川宿について学びました。
また、映画『日は好日』の上映や男性の育休について考える講座、衣類のたたみ方や若狭漆箸の研ぎ出し、さらにはスマホ撮影、チアアयोग、水



福井梅で梅ジュースをつくろう（体験講座）

引細工でストラップづくりといった体験講座を開催し、どれも好評でした。
「福井梅で梅ジュースをつくらう」の体験講座では、若狭町特産品の福井梅を使ったジュースを美味しく作るコツを教わり、「簡単に出来た。ジュースの他にもチャレンジしてみたい」との感想も聞かれました。
そのほか、日頃の活動を知ってもらうためのパネル展示や、毎年恒例の楽しいもの販売も行い、学びと交流の「ふくいきらめきフェスティバル」は、延べ400人弱の皆さまにご参加いただき、共に男女共同参画社会の実現への思いを深めました。
このフェスティバルを機に、互いに多様性を認め合い、輝く未来を描ける社会の実現へとつながっていくことを期待しています。

地域の文化活動

「財団助成事業の紹介」
当財団では毎年、県内の文化団体等の事業活動に助成を行っています。
助成事業の中から紹介します。

混声合唱団

福井コールアカデミー 定期演奏会

— 令和4年5月15日 —

3年ぶりに混声合唱団福井コールアカデミーによる第33回定期演奏会が令和4年5月15日（日）福井市のアオッサ県民ホールで開催されました。今回は「そんなにも うたいたくて わかちあう」をテーマに、同所属メンバー23人が「聴きたい、歌いたい気持ち」を原動力にコロナ禍で練習を積んできた成果を精一杯披露し、歌で元気を届けました。郷土を歌い感動を伝えた第1ステージ、希望や勇気を与えるディズニーの曲による楽しい第2ステージ、メンバーとおして紹介し合った曲による第3ステージと3部構成により計14曲が演奏されました。約180人の来場者は久しぶりの歌唱にメンバーと心から分かち合えた気分になりました。



第1ステージ ～五幡の坂～

東尋坊く平泉寺を走る マラニック大会

— 令和4年5月28日 —

坂井市の東尋坊と勝山市の白山平泉寺間を走る「第10回記念東尋坊愛のマラニック大会」が令和4年5月28日（日）に開催され、県内外から594人のランナーが参加しました。「マラニック」とはマラソンとピクニックを合わせた造語で、タイムを競わず、給水所で郷土伝承料理や会話を楽しんで走るイベントであり、地元の有志らでつくる実行委員会が企画しました。コースは東尋坊く平泉寺往復の103キロの部と平泉寺から東尋坊までの52キロの部の2コースで、途中に22か所のエイドステーションを設け、若狭牛のステーキやおろしそばなど、福井ならではの料理が振る舞われました。ランナーたちは、美しい景観の中で、美味しいご当地グルメに舌鼓を打ちながらの快走を満喫していました。さわやかな初夏の晴天の下で笑顔で駆け抜けた一日でした。



平泉寺をスタートする52キロの部の参加者

親子で工作・打ち上げ 紙ロケットのパラシユート

— 令和4年6月12日 —



親子でロケットの制作

宇宙でも太陽光発電や観測フライヤで活躍している「ミウラ折り」の技術を紙ロケットのパラシユートに応用して親子で制作し、水の力を利用して飛ばすイベントが令和4年6月12日（日）に敦賀市内の事業所広場で開催されました。このイベントは、SDGsの意義を共有し、子供への質の高い教育と資源を守る技術に挑戦する意欲を高めるため、NPO法人敦賀教育研究会が企画しました。当日は幼稚園児や小学生と、その親など約100組が参加しました。ロケットの工作では「ミウラ折り」の構造がチョウの羽化前の羽に存在することや、水の力でロケットを打ち上げるメカニズムに触れるなど、自然の中に色んなヒントがあることを感じました。未来に向けたロケットの制作と打ち上げに親たちも子供と一緒に楽しんでいました。



事業所広場でのロケット打ち上げ

ハーモニーぴくにくく（令和4年7月3日）

協賛事業



ピアノ、パイプオルガン、フルート、
サクソフォン、ヴィオラによる演奏

福井県文化振興事業団が主催する「ハーモニーぴくにくく」が令和4年7月3日（日）にハーモニーホールふくい大ホールで開催されました。毎年福井のアーティストたちの演奏によるクラシックコンサートで、今回も幼児から楽しめるピアノとパイプオルガンを中心としたプログラムでした。演奏はピアノとパイプオルガンにフルート、サクソフォン、ヴァイオリン、ヴィオラが加わり、可愛

くて子どもにも優しいクラシック音楽10曲が会場に響き渡りました。195人の来場者は小さなお子さん連れがほとんどでしたが、家族や友人といっしょに素敵な休日のひとときを楽しんでいました。

《プログラム》

- | | |
|---------------------|-----------|
| ・トランペット・ヴォランタリー | クラーク |
| ・ペールギュント「朝」 | グリーグ |
| ・パディネリ | J. S. バッハ |
| ・りす | デュボア |
| ・「動物の謝肉祭」から『白鳥』 | サン＝サーンス |
| ・「アルルの女」から『ファランドール』 | ビゼー |
| ・「動物の謝肉祭」から『水族館』 | サン＝サーンス |
| ・「アルルの女」から『メヌエット』 | ビゼー |
| ・「動物の謝肉祭」から『フィナーレ』 | サン＝サーンス |
| ・威風堂々 | エルガー |

写真コンテスト作品募集

2022 写真コンテスト

第16回

げんでんふるさと大賞

テーマ

ふるさとの四季「知られざる宝」

出品無料

- | | | | |
|--------|--|--------|--|
| ○部 門 | 学生部門・一般部門の2部門 | ○賞 金 等 | ふるさと大賞1点（20万円）、ふるさと賞3点（学生5万円・一般10万円）、優秀賞5点（学生3万円・一般5万円）、協賛社賞3点（記念品）、入選30点（記念品） |
| ○資 格 | ① 福井県に在住、または学校・勤務先が福井県内であること。
② 写真の専門家（プロカメラマン）ではないこと。
※当コンテストの関係者はご応募いただけません。 | ○審 査 員 | 審査委員長：水谷内健次氏（写真家）他5名 |
| ○作 品 | 応募点数は制限しません。ただし、応募者本人が県内で2021年～2022年（令和3年以降）に撮影したもので、自作の未発表作品に限りません。 | ○応 募 先 | ①（公財）げんでんふれあい福井財団（敦賀市本町2-9-16）
② 福井県カメラ商組合および県内フジカラー取扱店 |
| ○作品の規格 | カラー・モノクロで四ツ切、または四ツ切ワイドの単写真のみとします。（デジタルプリントも同様） | ○応募方法 | 指定の申込用紙（上記①②にあります。）に必要事項を記入し、作品の裏に貼って上記①②いずれかに提出ください。 |
| ○締 切 | 令和4年10月7日（金）当日消印有効（郵送の場合） | ○表 彰 式 | 令和4年11月13日（日）
げんでんふれあいギャラリー（敦賀市本町2-9-16） |
| ○発 表 | 令和4年11月10日（木） | | |

作品募集

編集後記

「げんでんふれあい福井」をお読みいただきありがとうございます。とございます。

今年1月に6年ぶりに復刊しました本誌ですが、本年度から年2回発行します。

本年度の助成事業は39件ですが、依然として収まりを見せないコロナ禍の影響で本年度も中止や延期に追い込まれる事業が出てきており残念です。一日も早く以前のような活動ができることを切に願っています。

昨年度に引き続き実施する「げんでんふれあいコンサート」は会場を2か所に充実して今秋開催する予定ですので楽しみにしてください。

今後とも皆さまに親しんで読んでいただける広報誌を目指して、イベントのお知らせや各地域の文化活動の情報などをお届けしていきます。次号は令和5年1月の発行予定です。



—— 財団助成事業の日程等 ——

9月以降に開催され、一般の方も参加（鑑賞）できる事業の主なものをご紹介します。是非、ご参加ください。
期日等は変更されることがありますので、事前にご確認ください。各事業に関するお問合せは、当財団事務局
(0770-21-0291) までご連絡下さい。

事業名	場 所	期 日
第31回福井県市町文協選抜芸能祭	越前市文化センター	令和4年 9月25日(日)
Joy Joy 敦活フェスタ	敦賀市きらめきみなと館	令和4年 9月25日(日)
第6回ふくいオカリナフェスティバル with shinichiro	福井市ハピリンホール	令和4年 10月1日(土)
箏曲演奏会～20周年記念～	敦賀市民文化センター	令和4年 10月2日(日)
福井太鼓の響	越前市いまだて芸術館	令和4年 10月9日(日)
うちの婆っちゃん一座公演	越前市文化センター 大ホール	令和4年 11月13日(日)
小浜男女共同参画ネットワーク 設立30周年記念文化講演会	小浜市働く婦人の家ホール	令和4年 11月26日(土)
第36回長唄杵屋弥登悠会 師籍50周年記念演奏会	福井市フェニックスプラザ 小ホール	令和4年 11月27日(日)
第20回たけのっ子劇場 ミュージカル公演	越前市文化センター 大ホール	令和4年 12月11日(日)
国指定無形民俗文化財 敦賀西町の綱引き	敦賀市相生町(西町)	令和5年 1月15日(日)
市民音楽祭2023年 PartⅢ	敦賀市民文化センター	令和5年 2月26日(日)
第18回まるおか子供歌舞伎	坂井市ハートピア春江	令和5年 3月 予定

財団イベント INFORMATION

イベント名	内 容	期 日	場 所	入場料・その他
げんでんふれあい コンサート2022 ～天高くこころ肥ゆる秋～	<構成・出演者> 第1部：ピアノ(ソロ・連弾) 第2部： ソプラノ、サクソフォン、 ピアノの共演 高橋 かほる(ピアノ) 和田 芳(ピアノ) 東 園(ソプラノ) 片山 奈々愛(サクソフォン)	令和4年 10月10日(月・祝) 14:00～15:50	南越前文化会館 (南越前町牧谷29-15) 入場定員250名	(公財) げんでんふれあい 福井財団主催 《入場料：無料》
		令和4年 10月15日(土) 14:00～15:50	敦賀市民文化センター (敦賀市桜町7-1) 入場定員400名	

※入場料は無料ですが入場整理券が必要です。ご希望の方は当財団事務局(0770-21-0291)にお問合せください。